

団塊の世代の抵抗精神に関する一考察

—1960年代後半の全共闘運動を中心に—

趙 沼 振*

1. はじめに

日本のベビーブームの世代である団塊の世代は2007年から60年定年を迎えて本格的に引退し始めた。2013年8月を基準に865万人、総人口の6.8%も占めているため、彼らの動向は常に注目されている¹。最近、マスコミでも団塊の世代の大量退職に関するニュースに溢れていた。このように定年退職を迎え団塊の世代の大学紛争を体験した全共闘というイメージとして認識される場合はめったにないと思われる。そのため、全共闘運動の意味が色あせる²と言う一部の主張もある。しかし、現在でも全共闘運動に関連した書籍などが多様に出版されている。この点はその事件が当時としては画期的であったのみならず、現時点においても考える価値があるものだと判断されている。

当時の高度経済成長によって高級人材の需要が増大しつつ、大学が急増して在学生の数も増えた。これによりエリート知識人を輩出する大学は飽和状態に達し、当時の大学生はもう自分たちが特出した存在ではないと考えるに至った。懐疑を抱きはじめた大学生は全共闘という名のもとに集結して「大学解体」を唱えはじめた。経済成長で豊かになった日本社会は教育システムすら消費の対象にしようとしていたため、全共闘は「資本主義」という不条理なシステムに挑戦し、抵抗精神を発揮しなければならないと考えた。このように「大学解体」と「資本主義の解体」のスローガンを掲げた大学紛争は圧倒的な人数を動員するようになった。しかし、大部分の学生たちは現実的な不安

に捕らわれて日常に戻って就職活動を始めた。そうしなかった学生たちは新左翼の路線を歩むようになりつつ浅間山荘事件などの過激な事件を起こしてしまった。このことをきっかけとして運動という概念は市民たちにそっぽを向けられるようになり、経済的な豊かさを楽しんだ日本のなかで薄れてなくなった。

ところが、全共闘運動以降に大規模なデモがめったになかった日本社会に新たな運動が登場した。2011年3月11日東日本大地震、そして福島第1原発事故が相次いで発生して脱原子力発電運動が登場した。また、安倍政権が平和憲法と呼ばれる「憲法9条」の改憲を推進しようとする、このことに反対する草の根運動が地域的に拡散している。しかし、外観に比べて社会的影響力が微々たるもので、マスコミでもなかなか扱われることがなく、少数派の位置にある。その理由は日本の社会運動が地域に基づいて主に日常生活に関連した争点だけを扱うからである。したがって、社会的な問題には無関心で改革的であるよりも体制順応的であるしかないのである³。また、このような運動の参加者は中高年層に偏り、若い世代の参加率は低いほうである。そのため、現在の社会運動が多方面で活発に行われていたとしても、世間の注目を集めるといった効果がないのである。

若い世代が主体になり社会運動をリードしたらより大きな効果があると思われる。普段ソーシャル・ネットワークを活用する若者こそ社会運動を積極的に導く者として向いているからである。しかし、全共闘運動を導いた団塊の世代とは違って

* 淑明女子大学 院生

今日の若者たちは運動という概念に無関心である。長期不況を経て若い世代のなかで格差が深刻化し、貧困率は上昇したからである。若者たちのなかで社会変革の意志を探しづらい状況になり、さらに自閉的な逃避を選択する若者も珍しくないことが現実である⁴。このような若者たちを見る団塊の世代の視線は否定的であるしかないと思われる。まさにこのような過程で世代間の葛藤が生じるようになる。そのため、中高年層を中心に様々な市民運動が持続されているが、若い世代の関心は低く1960年代のように活発な社会運動として発展しにくいと思われる。

このように現在の若者たちは厳しい格差社会で自閉的に逃避するのに汲汲として社会運動に直接参加してリードしようとはしない傾向があると思われる。このような問題点を省察し、解決策を模索するためには全共闘運動を考える必要があると思う。日本の社会運動史において団塊の世代の全共闘運動は若者たちが導いた最後の集団的な抵抗だった点で示唆に富むからである。

従って、1960年代後半に全共闘運動を体験した団塊の世代を考察しつつ、彼らが現代社会の若者たちを眺める視線はどのようなか確認していきたいと思う。また、団塊の世代が当時どのようなメンタリティを持ちつつ全共闘運動を経験したのか、また現在の若者たちはどのようなメンタリティで生きているのかに関して比較分析したいと思う。

一応、本稿では現代の若者たちが自分のことを判断している団塊の世代に対してどのように反論するのかを扱いたいと思う。そして、現代の若者を代表する古市憲寿と雨宮処凛の若者論を通してながら若者たちはどのような枠組みから考えているのかについて話していきたいと思う。

2. 先行研究の論点

若者論を扱っている先行研究として古市憲寿の

著書は『絶望の国の幸福な若者たち』(2011)、そして、雨宮処凛のは『生きさせる！—難民化する若者たち』(2007)がある。それぞれの論点を確認する前に、二人のことを簡単に紹介しておきたいと思う。

古市は日本の社会学者・評論家で、現代日本の若者をテーマにした評論をしている。代表作としてはこの著書で、世代間格差や就職難に苦しんでいる若者たちの幸福度が実は高いことを指摘して大きな反響を呼び起こした。雨宮は作家・社会運動家である。かつて右翼活動家であったが、左翼系論者に転向した。近年はプレカリアートの問題に取り組み、この著書が代表作である。

最近、人気のある若者論を呼び起こした二人の論点はある程度は似ているかも知れないが、異なっている点も確認できると思われる。これから二人の著書の内容を通しつつ、対立している部分を確かめていきたいと思う。

2-1. 古市憲寿の『絶望の国の幸福な若者たち』

まず、古市は世の中で語られるさまざまな若者の姿がどれくらい正しいのかを確かめている。今の若者は「内向き」になっていると評価されつつ、「個人志向」「地元志向」「嫌消費」だと語られる。しかし、古市によると、最近の若者たちは「個人志向」ではなく、意外と「社会志向」の側面もあるといわれる。しかし、若者が社会に貢献したいと思っているのに、実際に社会貢献活動に参加している若者の数は増えていないそうだ。次に、若者は完全に「地元志向」になったわけではないが、中央を目指さないでそこそこ生きていく若者の姿を見られるようだ。最後に、若者は「嫌消費」ではなく、日本の出生率が低くなったため消費もなくなったといわれる。若者が「内向き」だと現実には言えないが、ある程度は妥当な評価であろう。

しかしながら、若者たちは日本を変えるために社会運動に参加する姿を見せているそうだ。ここで、彼らの活動は閉塞感を紛らせるための表現活

動や「居場所」探しだという傾向が強いといえるだろう。そのため、若者たちはデモにお祭り気分で参加するようだ。最近ではデモに参加する方法も簡単だといわれる。インターネット経由として緩やかでフラットな繋がりが行き「居場所」を探せるようになるわけである。古市は、このように若者たちが新しいツールを駆使し、新しい社会運動を通して日本を変えようとしているといわれる。初期の社会運動は集合運動という形で、資本主義社会に対する矛盾から社会運動を展開したといわれるが、現在は若者にとって「居場所」としての社会運動が成り立っていると言えるだろう。

2-2. 雨宮処凛の『生きさせろ！—難民化する若者たち』

次に、雨宮は著書のテーマとして「生存」を掲げている。若者を生きさせるために、馬鹿にせずきちんとした人間として扱ってほしいメッセージを込めているわけである。

雨宮は現在の若者が20代のときにはやりたいことを探すためにフリーターとして夢を追い、30代になると夢を諦めてしまうという。そして、就職せずにフリーターとして自由に生きてきた若者は社会から排除され滞りようになることである。その結果、大半が死に至ってしまう。この問題はフリーターだけではなく、会社でまともに働いている派遣社員や正社員も含まれている。派遣社員は会社との契約期間が終わっても次々と働き続けるため、休む日があってはいけない。そのため、多くの派遣社員の女性が妊娠したら、会社から中絶を迫られるケースが多いそうだ。中絶をせずに出産することを決めたら、解雇されるといわれる。正社員の場合は、大変な就職難を経て、ついに正社員になったため、数えられない残業と夜勤の日々を耐えるしかないのである。大勢の若者は正社員をやめてしまったら、フリーターやニートになるはずなので、正社員を逃してはいけないと思うわけである。このように休まずに仕事を続けて、

ついに過労死に至る人が多いそうだ。こうして、若者が就職してもさまざまな観点で問題が起きている。これはただ若者の問題ではなく、社会構造が間違っているのだろう。

3. 先行研究の分析

3-1. 現代の若者論の比較分析

ここからは古市と雨宮の論点を比較しつつ、探してみたいと思う。

まず、古市は冷静な語調で格差社会のなか不幸ではなく幸せだという若者に関して分析している。つまり、古市が若者として自ら語る若者論でありながらも、否定・悲観的な観点ではなく客観的に若者の正体を探ろうとしていることである。

一番目に、古市は若者の幸福度を指摘する。現在の若者は「幸せ」な自分のことを「幸福だ」と感じながら、同時に「不安だ」とも思っているそうだ。ここで、古市によると、幸せになるための条件が二つあるそうだが、それは「経済的な問題」と「承認の問題」である。一見、今の若者は貧困ではないように見えるけれど、その理由は「家族福祉」のおかげだそうだ。つまり、古市は若者が経済的に問題がない親と共に住んでいるため、若者の貧困というのはまだ未来の問題として扱われると主張するわけである。次に、インターネットのなかで承認され繋がりができることは現在の問題だと主張している。さらに、若者が自ら選択した人と繋がっていくので、「無縁社会」と定義するよりも「選択社会」と言い換えたほうが良いといわれる。しかし、ここで、古市の意見に指摘したい点があると思う。若者の「経済的な問題」のところ、古市が親から独立した若者のことは真剣に考えていないことが物足りないと思われる。かつてホームレスになってしまった若者が急増しているという他の側面もあるのに、若者の幸福度を確かめるためには、より正確に若者の「経済的な問題」を探る必要があるだろう。この点は、後に述べる雨宮の観点とともに確認してみたいと思う。

二番目に、古市は社会にある現象が起こると簡単に若者の問題だと思いつまみに社会構造と結び付けて考える必要があると述べている。団塊の世代は「近頃の若者はけしからん」とよくいうそうだ。ここで、若者をバッシングする一括的なパターンが二つあることを確かめる。一つは、自分たちの時代と比べて、今の若者はダメだというパターンである。例えば、若旦那批判と左翼学生の批判である。二つは、若者が羨ましくて、今の若者はダメだというパターンであるが、「リア充学生」を批判することを示す。このようにパターンが一括的な理由は若者を語ることに限界があるからだろう。それは、ある現象が日本に現れると若者個人の問題または若者特有の問題と結びつけて考えてしまい、社会構造の実態や変化のことは考えない場合が多いためだといわれる。そのため、古市は若者の性質と社会現象をともに探る必要があるといいながら、若者バッシングに反論している。

最後には、古市は東日本大震災を通して募金運動などでニホンブームが出現したという。さらに、これは若者がさまざまな社会運動に参加しようとしたきっかけになったといわれる。若者は現在の生活に満足しているように見えるが、どこか変わらない毎日に閉塞感を感じているようだ。このような気持ちが若者たちをボランティアなどに向かわせたと主張している。ここで、問題は、その彼らがコミットする対象が見えにくかったこと、つまり社会との具体的な回路が不在だったことである。そのため個人よりも国や社会を大切に考える若者が多いにもかかわらず、多くの若者たちは動き出せずにいたようだ。しかし、若者たちは東日本大震災を契機として、「今、みんなが一つになる理由ができた」ことで、ナショナルイズムとは少し異なっているニホンブームが起こるようになったといわれる。つまり、団塊の世代のように体制を変えるため改革を唱えたわけではないけれど、現在の若者は自分の居場所として日本を考えていると思われる。

次に、雨宮は社会運動家として刺激的に表現している。ルポの形式で若者の貧困と怒りの反撃を社会に訴えている。なぜ「生きる」ことがこんなに大変なのかに関して分析しつつ、企業に使い捨てられる派遣社員、名ばかり管理職の正社員、そして急増する若者ホームレスの実態を取材して整理している。

まず、雨宮は、若者が常に死に脅かされていて生存しなければいけないことはもちろん狂っている社会が若者を犠牲者にする主張している。最近、過労死はもちろん過労自殺が頻繁にあり、日本社会は「狂っている」と表現してもいいほど生きづらくて死んでしまう若者の数が増えていくといわれる。失業や就職のプレッシャーによるストレスがたまり続けると、若者は自己責任だと思いつまみになるようだ。このような問題は若者が就職せずに、フリーターを選び始めた頃から明らかに現れる。フリーターを選んだ人は自給が下り始めると、自然に不況に直面する状況に落ち込んでしまう。仕事は誰にでもできるつまらないもので、単純作業をすればするほど自己否定につながっていくという悪循環のなかに落ち込んでしまうことである。しかし、社会が自分自身に求めている単純労働に疑問を持ったら、「お前の代わりはいくらでもいる」と言われクビになってしまう場合が数多くあるそうで、このような生活は不安定で、ついに不安定な心理状態にするといわれる。この点において、若者は幸せながらも不安を感じていると古市は述べているが、雨宮の観点だけを見ると若者はただ不安だけを感じているように見える。

続いて、雨宮は不安定な若者だからこそ、彼らはプレカリアートとして社会デモに参加するようになったと主張する。ここで、フリーターのように「不安定さを強いられた人々」のことをプレカリアートと呼ばれるようだ。この言葉は「Precario（不安定な）」と「Proletariato（プロレタリアート）」を合わせた造語である。最初から若者がプレカリアートになったわけではないだろう。彼らがフリ

ーターとして生活しようと思ったきっかけは「やりたいことがある」という理由であった。言い換えれば、夢を追うためにフリーターを選んだそうだ。しかし、大体の人はフリーターの生活をしながら、やりたいことを見つけられないまま、様々な仕事に手をつけていくだけだといわれる。ちなみに、雨宮によると、生きづらい若者は社会との「接続感」を持たないという問題があるそうだが、これは古市が語った若者の居場所探しとも関連があると思われる。このように若者は社会に参加しているという意識があまりにも希薄で、どことも繋がっている認識がなく、漂っていることに不安を感じているようだ。そのため、若者が社会との「接続感」を持つため、社会デモに参加するようになったといえるだろう。社会から排除されないため、さらに「素人の叛乱」や「フリーター労組」のように様々なデモ団体を作り出してきているが、これは単純な社会運動ではなく、プレカリアートの運動として行われるわけである。このように若者は死に脅かされている存在でありながらも生存するためにプレカリアートとして社会運動に参加すると思われる。

3-2. 1960年代後半の若者

それでは、1960年代後半の団塊の世代はどのような若者だったのだろうか。若者をよくバッシングする団塊の世代は彼らが若者のときに現在の若者とはどのように異なったのだろうか。当時の教育システムは激しい受験競争をもたらし、団塊の世代に「戦後民主主義」に矛盾があるということを見せてしまった。ここで、彼らは三無主義、いわゆる無気力、無関心、無責任になってしまうけれど、これは団塊の世代が戦後民主主義に対する抵抗精神の一步だといえるだろう。そのあと、団塊の世代は全共闘運動を通して体制を変えようとした。

これからは現代の若者論とともに団塊の世代が経験した全共闘運動を分析しつつ、若者が既成世

代に対する反論をより導き出したいと思われる。

4. おわりに

古市は現在の若者がマスコミまたは団塊の世代から語られる一々に関して反論してる。分析的でこれから若者がどこを向いていくと良いのかを整理した。しかしながら、雨宮の場合は直接に団塊の世代に反論する部分はなく、ひたすら現代の若者がプレカリアートとして生存するために頑張っていると語っている。この点は社会現象を考えずに、ただ若者が怠惰になったと評価する既成世代に反感を表したといえるだろう。つまり、雨宮は既成世代が現代社会の形状そのままだと考えているため、今の若者の生きづらさを強調したと思われる。

団塊の世代は全共闘運動を経験したあと、大体は年功序列を重んずる経営をする企業に就職し、ファイトカラーとしてのプライドを持ちつつ日本の経済を発展させたとも思う。しかし、現代の若者は就職難で大変苦勞をするのはもちろん就職したとしても年功序列に守られないわけである。このように彼らは不安定なブルーカラーとして生活しつつ、いつでもホームレスになる不安を感じているのだろう。

このように最近もマスコミでさまざまな若者論が溢れている。既成世代は「近頃の若者はけしからん」とよく言うけれど、古市と雨宮は自ら若者として日本社会の現象を結び付けて反論しようとした。これからこのような反論はより増えていくだろうと思われる。社会に無関心であったり、社会から逃避したりした若者は自らこのままだといけないということを決心し始めたかも知れないのであろう。かつて団塊の世代が全共闘運動の経験を通して「戦後民主主義」に対する抵抗精神を示したとすると、現代の若者はネオリベリズムになった日本に対する抵抗精神を示していくと思われる。

本稿を通して現代の若者は日本社会をどのような枠組みで考えつつ、彼らが若者バッシングに対する反論をどのように展開したかを確かめてみた。今後、この作業をより深くし、現代の若者を批判する団塊の世代のケーススタディーを進めてみたいと思う。

註

¹ 総務省統計局, <http://www.stat.go.jp/index.htm>

² 桂秀実, 『1968年』, ちくま新書, 2006, p.8

³ Han Young Hae, *The Meaning of "Seikatsu" (Life) in the Citizen's Movement in Contemporary Japan*, Korean Journal of Japanese Studies No.4, Institute For Japanese Studies, Seoul National University, 2011, p.111

⁴ Kweon Suk In, 'Sotokomori': *Escaping from the Blockage of Japanese Modernity or Scapegoats of Neoliberalism*, Korean Journal of Japanese Studies No.5, Institute For Japanese Studies, Seoul National University, 2011, pp.40~41

参考文献

雨宮処凛, 『生きさせろ!—難民化する若者たち』, 太田出版, 2007.

小熊英二, 『1968〈上〉若者たちの叛乱とその背景』, 新曜社, 2009.

小阪修平, 『思想としての全共闘世代』, 筑摩書房, 2006.

桂秀実, 『1968年』, ちくま新書, 2006.

鈴木謙介・芹澤一也・橋本努・荻上チキ・ニ秀實, 『革命待望!—1968年がくれる未来』, ポプラ社, 2009.

毎日新聞社, 『1968年に日本と世界で起こったこと』, 毎日新聞社, 2009.

古市憲寿, 『絶望の国の幸福な若者たち』, 講談社, 2011.

吉見俊哉, 『ポスト戦後社会—シリーズ日本近現代史〈9〉』, 岩波書店, 2009.